満たされない器は春を待っている

Public 7views 38958
2024-09-27 20:49:00

RK1600フェス2023で販売した本の全文公開中です。
短編三本です。現在もBOOTHにて販売しております。
RK1600フェス2024(10/5～10/6)の間の限定公開です。イベント終了後に削除します。

Posted by **@captain_enpaku** (/u/captain_enpaku)

1 2 3

Page : 1/3

《ニケ》

　身を隠しているコンクリートの壁からわずかに顔を出し、飛んできた弾丸に６０は再び身を隠す。通路を挟んで、反対側の壁に同じように身を隠しているコナーに向かって、盛大な舌打ちをした。
　その音が聞こえたコナーは、憎々しげな表情を浮かべている６０を鼻で笑う。その顔は白く、素体が晒されていた。コナーが向こう側に足元の瓦礫の一部を投げた。遠くで悲鳴が上がる。
　６０に得意げに笑って見せたコナーに向かって、敵側から飛んでくる銃弾。それに対して６０が同じように瓦礫を投げつける。二つがぶつかり合い、地面に落ちた。６０がため息をつくと、コナーは肩をすくめた。
『礼ぐらい言えないのか？』
『助けてくれなんて言った覚えはないけど』
　コナーが６０へ向けて腕を振った。ものすごいスピードで飛んでくる物体に、６０の体が硬直する。
　６０のすぐ後ろで悲鳴と、なにかが倒れる音。振り返った６０の足元に倒れて呻いているアンドロイド。どうやら下肢駆動に必要なパーツに、コナーの投げた瓦礫が命中したらしい。それに６０が素早く手錠をかける。

『お前のせいだ』
『それはどうかな』
『僕一人だけなら、とっくの昔に署に戻ってる』
『いいや、君だけならとっくの昔にスクラップだ』
　６０のこめかみのＬＥＤが光る。コナーのこめかみにＬＥＤはない。眉間に皺を寄せたまま通信で言い争っている二人は、最後にこう言い放った。
『だからこいつとは嫌だったんだ』

　△

　コナーと６０は、互いの利き手の腰部分に隠しているハンドガンを確認した。隣で同じ行動をとる今回限りの相棒を見て、そろってため息をつく。
「足を引っ張るなよ」
「それ、僕の台詞だから」
　互いに数秒睨み合ったあと、目を逸らした。
　今回の任務。コナーと６０の共同捜査。アンドロイドのパーツを違法売買しているという情報のある、大人数グループの検挙。その現場の廃工場に二人は来ていた。
　同じ機体、同じ顔、同じ声。息は合うが仲が良いわけではない。むしろ、周りから同じアンドロイドとして扱われることに、互いに辟易としていた。
「どうするんだ」
「え、丸投げ？」
「……なにか案があるんじゃないのか」
「その言葉、そっくりそのまま返すよ」
　コナーと６０との間に、火花が散っているように見える。同じ顔で、憎しみを全面に押し出した違う表情を作っていた。
「そもそも」
　睨み合っていても仕方がないと思ったらしい６０が、コナーに向かって話の続きを切り出す。
「今回は囮捜査でも潜入捜査でもない。真正面から突っ込んで行くのは得策じゃないだろう」
「それに関しては同感だね。向こうの人数もはっきりしないし」
「なら分かれて行くか？　話なら、わざわざ人間みたいにしなくたって、通信で足りる」
「とりあえず情報が足りない。分かれて侵入、見つからないように情報収集といこう」
「了解した」
「失敗しないでよ」
「その言葉、そっくりそのまま返してやる」
　先ほどのコナーの言葉を、６０が真似をする。コナーが軽く舌打ちをすると、６０の唇が愉快そうに弧を描いた。

▲

　薄暗い廊下を歩く。階段を上り、右、左、左、しばらく直進、また右。同じような景色が続く場所を、６０は慎重に調べていた。人間であれば迷ってしまうだろう。
　背後からの気配に、すぐ近くにあった部屋に入り、６０は扉に身を潜めた。何者かが通り過ぎようとするのを待つ。どうやらアンドロイドのようで、薄暗い廊下の壁にＬＥＤがほのかに反射している。
　６０に気がつくことなく向こうへ歩いていったアンドロイドを確認し、６０は部屋を見渡した。情報源になりそうな、部屋の奥にあるパソコンに手を添える。中のデータを吸い出し、首を傾げた。
『聞いていた話と違うな』
『なにか見つかった？』
『データが。だが……』
　コナーと通信をしながら、６０は取り込んだばかりのデータと自分の中の情報を照らし合わせる。
　この場所は、人間がアンドロイドのパーツを違法売買しているということだった。しかし、データの中にあるのは人間の情報ばかり。それも複数の犯罪歴がある人間の身辺情報。アンドロイドに関係するものは、なにもない。
『さっきもアンドロイドが歩いてた』
『人間が絡んでる可能性はないってこと？』
『自らを人間と偽って違法売買？　どうもピンとこないな』
『もう少し調べないとね』
『言われなくても』
　６０はそっとドアを押した。わずかに軋んだが、それほど大きな音ではない。左右を素早く確認すると、次の物陰へと駆け込んだ。
『そっちは？　なにかあったか？』
『あんまり。もう少し大胆にいってみるよ』
『僕に面倒をかけるなよ』
『言われなくても』
　通信越しにノイズが入ったような気がした６０は、一瞬顔をしかめた。コナーにその理由を聞いたが、小さく笑うだけで答えようとはしなかった。

▲

　錆びたロッカーにある作業着に、コナーは身を包んだ。あちこち油染みはあるが、アンドロイドであるコナーには大した問題ではない。そのまま顔の流動皮膚を素体に戻す。
　６０と通信で情報交換を行いながら、こめかみのＬＥＤを近くにあったガラスの破片で外して、胸

ポケットに収めた。それを６０に勘づかれたようだったが、笑って流す。
　割れた鏡をコナーが覗き込む。そこに映っているのは、薄汚れた服を着た真っ白な顔の自分。
　普段の凛とした捜査補佐ではなく、変異して居場所を追われ、さまよっているアンドロイドに似ていた。警察のアンドロイドであることを悟られないために咄嗟に思いついたことだったが、なかなかの出来だ。
　その格好のまましばらく廊下を歩く。今となっては誰も寄りつかない廃工場だが、元々は大企業の所有物だったようで、かなりの敷地面積がある。正直、コナーと６０の二人だけでは手に余った。適当に練り歩いても、誰とも会うことはなかった。
　そのまま捜査という名の散歩を続けていると、向こう側から人影が見えた。向こうもこめかみのＬＥＤはないが、流動皮膚はそのまま。アンドロイドであることはスキャンすればわかる。
「誰だお前」
　アンドロイドは、不審そうにコナーを見た。コナーは素早く思考する。
　ここで目の前の相手を破壊してしまってもいいのだが、今の目的は情報収集。相手をするのが面倒だからという理由で処理してしまえば、６０から小言をもらうに違いない。それを想像するだけで、コナーは舌打ちが出そうだった。
　それを堪えて、いかにも《気弱そうで困り果てている様子のアンドロイド》の顔を作る。
「ええっと……人手が足りないって聞いてね、他のアンドロイドにここへ来るように言われたんだけど……なにをすればいいのかまでは聞いてなくて、とりあえずこの中を歩き回ってたんだ。あの……君はなにか知ってる？」
「あぁ、なんだ。お前も仲間か」
　あっさりとコナーの言葉を信じたアンドロイドは、コナーに着いてくるように言った。
『上手く行きそうだよ』
『ろくでもない手段を取ってることだけはわかった』
『効率がいいからね』
『返り討ちに合うなよ』
『まさか。君じゃあるまいし』
『僕はそんな状況に陥ったことはない。そもそもあの事件のときはお前が――』
　６０が過去の話を蒸し返そうとしたので、コナーは通信を切った。目の前のアンドロイドの背中を追いながら、辺りを観察する。
　アンドロイドは、廃工場の裏通路ばかりを選んで通っているようだった。似たような景色の通路を何度も曲がる。人間であれば道順を覚え切れないだろう。
　通路や合間に見える部屋の壁に、いくつか人間の血痕が見えた。少し時間が経っているようだ。ブルーブラッドの跡はない。
　６０が手に入れたデータによる推測どおり、人間が違法売買を行っているというそもそもの話が、疑わしくなってきていた。
「どこへ行くの？」

「もう少しで着く」
「なにをするかだけでも、教えてくれない？」
「人間を痛めつける。俺たちにした仕打ちを、そっくりそのまま返してやるのさ。爽快だぜ」
『馬鹿らしいな。結局、辿り着く考え方は人間と同じか』
『盗聴しないでよ』
『お前が勝手に通信を切るからだ』
　人間をどう痛めつけるかを意気揚々と語るアンドロイドに適当な相槌を打ちながら、コナーは６０との通信を続けた。アンドロイドの話と、６０が集めたデータから現状分析をする。
　事の始まりは、人間によるパーツの違法売買。それもまだ稼働しているアンドロイドから、無理やり剥ぎ取る形で。
　そしてそのアンドロイドたちからの逆襲に合い、違法売買に関わっていたグループ全員がこの廃工場に監禁され、身体的な苦痛を受けているようだった。
『なんと言うか……』
『同じ穴のむじな？』
『そこまでは言ってない』
『血の気の多いアンドロイドもいるんだね。アンドロイドに血の気っていうのは、違うかもしれないけど』
『捕まえる相手が増えて手間なだけだ』
『みんな死んでたほうがよかった？』
『ノーコメント』
　喉から笑いが漏れそうになったのを、コナーは押し殺した。幸いにも、目の前を歩き続けているアンドロイドは、なにも気がついていないようだった。
「ここだ」
　声と同時に照明がつく。広い部屋の両側に、それなりの大きさの檻がいくつか並べられている。中身は人間、人間、人間。
　どの人間も生きてはいるが、弱っていたり怯えていたりして、コナーたちの行く先をじっと目で追っていた。
「どいつがいい？　好きなのを選べよ」
　アンドロイドは、下品な笑いを浮かべながらそう言った。部屋の隅に置いてある様々な道具を、吟味するように眺めている。それら全てに血痕があった。
『悪趣味だ』
『そんなことより、君は今どこにいるの？』
『もう二分ほどで合流できる』
『なら、こいつはもういい？』
『……再起動不能にはするなよ』
　なんの返事もしないコナーを振り返ったアンドロイドの横顔に、コナーは拳を叩き込んだ。ひっく

り返るアンドロイド。拷問用の器具が吹き飛び、大きな音を立てた。アンドロイドが呆然としている隙に喉元を押さえ、強制接続を行う。
　アンドロイドは何度か瞬きをしたが、なにも言わないままその瞳孔から光が失われた。それを確認し、コナーは手を離す。
「殴ることはなかっただろう」
「気分転換だよ」
「お前の？」
「それ以外になにがあるの」
　追いついてきた６０が、普段通り両手を擦り合わせるコナーを非難するように見た。コナーはそれをわかっていて、わざとらしく目を逸らす。
「人間擁護派のアンドロイドはこれだから」
「君だって、人間は嫌いじゃないだろう」
「好きでもないがな」
　コナーが強制スリープに落とし込んだアンドロイドに、６０が手錠をかける。檻の中の人間たちは、その様子を黙って見守っていた。
　６０がコナーの今の姿をじろじろと眺めて、小さく首を振った。
「なんだその格好」
「いいでしょ。羨ましい？　潜入捜査官って感じで」
「みすぼらしいだけだ。元に戻せ。並んで歩きたくない」
「言われなくても」
　得意げに笑うコナーが、ＬＥＤを胸ポケットから取り出そうとしたところに、耳をつんざくような警報音が部屋中に響き渡った。人間たちが悲鳴を上げて、逃げる場所のない檻の隅に縮こまる。
　瞬時に事態を理解した二人が、揃って肩をすくめた。
「見つかったな」
「あーあ。面倒くさい」
「お前が眠らせたそいつに、共有信号でも仕込まれていたんだろう……全く、手間がかかる」
「始末していいって言ったのは君じゃなかった？」
「そんなこと言ってない」
「いいや言った。会話ログに残ってる」
「言ってない。しつこいぞ」
「しつこいのは、自分の間違いを認めない君のほうだ」
「仮に僕がいいと言ったにしても、もう少し慎重に——」
「そんなことどうでもいいから、お前ら俺たちを助けろよ！！」
　二人の会話を遮るように、檻の中の人間の一人がわめいた。それを皮切りに口々に騒ぎ出す人間たち。面倒くささそうな顔を隠そうともしないコナーが、６０の方を向いた。
「静かにしてもらう？」

「血の気が多いのは、お前じゃないのか」
「今からここを離れるとして、彼らに僕らの居場所をバラされるのは面倒でしょ」
「だからって口封じをするな」
「どうしても？」
「どうしてもだ」
「残念だな」
　言葉とは裏腹に、とても楽しそうにコナーは笑った。腹の中ではどす黒い感情が渦巻いている。
　６０は薄ら寒いような気持ちを覚えて、それを誤魔化すために腕を組んだ。
「人間擁護派だと思ってたんだが。違うのか？」
「擁護派だよ？　身近な人間限定だけど」
「訂正する。お前は人間過激派だ」
　６０の言葉に、コナーが気が晴れたように笑う。二人とも変わらず、わめいている人間たちのことは無視し続けていた。
「とりあえず逃げる？」
「そうだな。応援を呼んで、撤退が懸命だろう」
「応援はもう呼んでおいたよ。そろそろ工場前に集まってると思うけど」
「なら、さっさと行くぞ」
「おい！　俺たちを置いて行く気か！？」
「うるさいな。すぐに他の人間が来る。静かにしてろ」
　６０までもが人間たちに向かって面倒そうにそう言い放つと、二人揃って部屋を出た。

　▲

「で？」
「で……って？」
「このルートじゃ、外には出られないぞ」
「そうなの？　僕は君に着いてきただけなんだけど」
「ルートの予測はお前もできるだろう」
「優秀な君に任せてれば大丈夫かなって」
「嫌味をどうも」
　二人は軽く走りながら、入り組んだ工場の裏通路を進んでいく。警報が鳴ったきりで、追手はない。コナーが速度を落としたのに合わせて、６０も歩きに変える。
　遠くで破裂音が聞こえた。６０とコナーは互いに顔を見合わせる。
「突入してきたのか？」
「どうだろう。そこまでの相手じゃないし、ＳＷＡＴは来てないはず——」
　コナーが言葉を切った。外部からの通信が入ったらしいと察した６０は、コナーの様子を横目で窺

う。静かに瞬きを繰り返していたコナーの頬が、わずかに上がった。
「あー……」
「どうした」
「良いニュースと悪いニュースと、普通のニュース。どれを聞きたい？」
「ドラマの見すぎだ」
「まぁまぁ……とりあえず、選んでよ」
６０は顎に手を当てる。これは６０が考え事をするときの癖だ。それを知っているコナーは、６０の返事を待った。
「なら良いニュースからにしよう。次に普通、最後に悪いものだ」
「もしかして君って、デザートから食べるタイプ？」
「アンドロイドにそれを聞くか？　早く話せ」
弾んだ声を出しているが、素体のままのコナーの表情は読みにくい。６０は普段以上に不機嫌そうな顔で、コナーを睨んだ。
「良いニュースは、応援が到着したこと。普通のニュースは、人間は全員助け出されたこと」
「悪いニュースは？」
コナーが完全に足を止めた。自分の足元を観察しているように見える。６０もつられて、自分の足元に目線を落とした。どこからか漏れ出している液体が、ほんの少しだけ二人の爪先に触れている。
「この廃工場には、まだ山ほどの在庫が残ってること」
「在庫？」
「ここがなんの廃工場か、知ってる？」
笑っているのではなく、コナーの頬が引きつっていることを、６０はようやく視認できた。再び足元を見る。液体は無色透明、鼻腔センサーで香りは検知できない。屈んで液体を指ですくい、口へ運ぶ。
「……化学薬品か」
「引火性の高い、を付け加えてほしいね」
二人はほぼ同時に、己の腰に収めているハンドガンの存在を思い浮かべていた。
発砲する際のわずかな火花で、おそらく爆発が巻き起こるであろうことと、先ほどの破裂音の正体によっては脱出は一刻を争うことを、二人は目だけで会話し合った。
「多少、気化してるな。ここにいるアンドロイド共は、それを知ってるのか？」
「知ってたら、ここにはいないんじゃない。少なくとも僕なら、ここを拠点には選ばない」
「だろうな。だとすると最悪の事態が――」
６０が話し終えるより先に、轟音と共に地面が揺らいだ。最悪の自体が間近に迫っていることを知り、二人は今日何度目になるかわからないため息をつく。
「お前といると、ロクなことにならない」
「それ、僕の台詞だから」
二人はそれぞれ、メモリー内の順路を確認する。

アンドロイドである二人には、記憶を引き出すこともそれを元に脱出することも容易い。ただし今は、その道が無事に通ることができれば、の話だ。
「応援に来た署員は？　まだ中にいるのか？」
「あの檻の中の人間を連れて行って、そのまま一緒に外に出たって」
「なら、残ってるのは僕らだけか」
　二人はその情報に少し安心する。二人だけなら、多少強引にでも脱出することが可能だからだ。
「人間たちを監禁してたアンドロイドが残ってる」
「いても数人だろう。さっきの爆発音で逃げ出すと思うが」
「署員からの通信情報によれば十五体だ。さっき一体仕留めたから、残りは十四」
「じゅっ、」
　予想を上回るアンドロイドの数に、６０が驚いて目を見開いた。その顔を見てコナーが吹き出す。
「あはっ、すごい顔」
「そんなにいるのか！？」
「暇なんだろうね」
「暇のひと言で済ませるな」
「見つけた！　お前らだな！」
　言い合いを続けていると、大声がした。部屋の入口から、見知らぬアンドロイドが二人を指さしている。どうやら、コナーが話していた十四体のうちの一人らしい。
　そして二人の目線は、アンドロイドがもう片方の手で握るハンドガンに、吸い寄せられていた。
「……おい、待て」
「うるさい！　アンドロイドのくせに、人間の味方しやがって！」
「あー……怒ってるのはわかるけど、とりあえず話し合おう、ね？」
「話し合う必要なんかない！」
　二人は両手を軽く上げて、目の前のアンドロイドを落ち着かせようと試みた。激怒しているらしいアンドロイドは、ハンドガンを二人に交互に向ける。
　二人の足元には、液体が流れ続けている。万が一、あの引き金が引かれてしまえば、爆発をまともに食らうことになるだろう。
　逃げるか、説得するか、倒すか。考えている時間はない。
『どうする』
『倒すしかない』
『銃は使えない。素手にしては距離がありすぎる』
　アンドロイドは部屋の入口に、二人は部屋のほぼ反対の壁際にいた。互いに五メートルほどの距離がある。駆け出して攻撃を加えるにしても、初手で出遅れてしまうだろう。
『気を引くだけなら、これで充分だ』
　コナーが、６０でも目で追えないほどの速さで右腕を振った。コナーの手からなにかが飛んでいったことだけは、６０にも認識できた。

アンドロイドが驚いた声を上げて、尻もちをつく。それを逃さず、コナーが一気に距離を詰めて馬乗りになった。抵抗しようとしたアンドロイドに強制接続し、スリープモードへ移行させる。
　あとから追いついた６０は、足元にひしゃげたＬＥＤパーツが落ちているのを見つけた。それを拾い上げる。コナーが投げつけたのは、それだとわかった。ついでに、アンドロイドが持っていたハンドガンも懐に収める。
「ＬＥＤがダメになったぞ」
「新しいのを発注すればいいだけだよ」
　相変わらず薄汚い服を身にまとい、素体の顔を晒しているコナーを、６０は呆れたように眺めた。当のコナーはなんとも思っていない。
　コナーは、アンドロイドを引きずっていくと、窓を開けて放り投げた。数メートル下の業務用のゴミ箱に着地させる。
「あそこに置けば、誰か迎えに来るでしょ」
「多少乱暴に扱っても問題ないのは、アンドロイドの利点だな」
「あ、僕らも飛び降りて逃げる？」
「ＲＫシリーズは繊細なんだぞ。この高さのダメージは受けないほうがいい」
　いいことを思いついたと目を輝かせたコナーの提案を、６０が即座に却下する。
　ＲＫシリーズが本当にそこまで繊細なのか、６０が自分の制服を汚したくないのか、わからない。が、コナーは後者だと考えている。
「まぁ汚いしね」
「ゴミ箱から拾った服を着てる奴が、なにを言ってるんだ」
「ゴミ箱じゃないよ。ロッカーにあったんだ」
　それほどだろうか、とコナーは自分の視覚の範囲で、自らの格好を確認する。普段よりはずっと汚れているが、これはまぁこれで、と開き直りつつあった。
「そんなことより早く行こう。これだと、他のアンドロイドも武器を持っている可能性が高い。無知な奴らのせいで死ぬのは御免だよ」
「それだけは同感だ」
　二人は通信で、互いに記憶している通路を照らし合わせながら、急いで廃工場への出口へと走る。
「いたぞ！」
「こっちだ！」
「捕まえろ！」
「クソ野郎共が！」
　廊下を曲がり階段を下りる度に、新しいアンドロイドと出くわした。仲間同士でコナーと６０の情報を共有しているようで、どのアンドロイドも二人を見かけると悪態をつきながら追ってくる。
　一体ずつスリープモードにさせるのは効率が悪いと踏んだ二人は、そのまま自分たちを追いかけさせる形で、出口を目指した。
『もうじきだ』

『このまま外に出て、こいつらのことは待機してる署員に任せよう』
『それまでに、なにもないといいが』
『そういうのってフラグって言うんだよ。知ってた？』
　コナーが呑気にそう言うのを、６０は無言で流す。後ろから追いかけて来ていたアンドロイドのうちの一体が、痺れを切らしたように叫んだ。
「全員で撃て！！」
「えっ」
「待てっ――！」
　６０の制止の言葉とほぼ同時に、ふわりと二人の体が宙に浮いた。その直後に轟音と、強く背を押されたような衝撃。そして、それぞれが壁に強く叩きつけられた。
　二人の視界にいくつものエラーが散る。砂煙が立ち込め、視界が悪い。破損箇所はないが、普段より情報処理に時間がかかった。
「くそっ……生きてるか」
「とりあえず、ね……彼らは多分、ダメだろうけど」
　６０の声にコナーが振り返る。ここまで通ってきた道は完全に瓦礫で塞がれ、追ってきていたアンドロイドたちも、見えなくなっていた。
「全員アンドロイドだっただろう。瓦礫の中からパーツを掻き集めて、組み合わせればまた動くんじゃないか」
「結構ひどいこと言うよね、君も」
「そんなことより……道が」
　立ち上がった二人は、目の前の砂煙を払うように手を振った。これから通るはずだった道までもが、爆発で崩れてきた壁や天井によって塞がれてしまっていた。
「まぁ、他のルートで出られなくもないが」
「ちょっと時間がかかるけど、それしかないね」
「他のアンドロイドがまだ残ってるな」
「追いかけてきたのが五体だから、あと九体だね」
　律儀に残りのアンドロイドの数を報告するコナー。それら全てが、まだこの廃工場に残っているのかどうかは疑問だったが、ここまで二人を追ってきたアンドロイドたちの危機管理能力のなさを思うと、避難していない可能性が高いだろう。
「そいつらに出くわしたら面倒だ」
「また撃たれたりしたら余計にね」
「見つかる前に抜け出すぞ」
「了解、キャプテン」
「ふざけてる場合か、ポンコツ」
　二人は協力して瓦礫を動かしつつ、迂回路を辿った。通信で外部との連絡を取り、爆発の危険性があるため、現場に近寄らないように忠告をする。

「６０」
　コナーが口を開く。なにを話そうとしているのか察した６０は、聴覚センサーの感度を少し落とした。
「聞きたくない」
「良いニュースと悪いニュース、どっちが知りたい？」
「それはあいつらに関係ある話か？」
　６０は壁を指さした。コナーは頷く。スキャン機能が備わっている二人には、その向こうに隠れている五体のアンドロイドが見えていた。
「良いニュースは――」
「出口が近いこと、だろう」
「そう。なら、悪いニュースはなんだと思う？」
「あいつらが銃を持ってること、だろうな」
「ご名答」
　コナーが６０に向かってウィンクを飛ばした。迷惑そうに顔を歪めたあと、６０は壁越しにアンドロイドたちを睨みつける。
「ふざけてる場合か。どう抜ける」
「ここから先、別の道はない」
「突っ切るしかないか」
「この辺りは出口に近い。外気も入ってきてるし、爆発の危険性はさっきよりは低いはずだ」
「そういうのは、フラグって言うんじゃなかったのか」
「もちろん。確証はないよ」
　二人は顔を見合わせる。コナーは相変わらず素体のままだ。ＬＥＤも、先ほどの場所へ捨ててきてしまった。普段のコナーと違う目の前の相手と今の状況に、６０は落ち着かない気持ちになる。
「……行くか」
「足を引っ張らないでよ」
「どの口が」
　二人は壁際に一度背をつけて体勢を整える。目を合わせてタイミングを見計らうと、同時に飛び出した。二人に気づいたアンドロイドたちが、怒号を上げながら銃口を向けた。
　そして、冒頭の状況に戻るのである。

▲

『ったく……馬鹿みたいに撃ってきやがって。ここがどういう場所か、本当にわかってないようだな』
『あっち側で爆発してくれればいいのに』
『この距離だと巻き込まれる』

『死にはしないよ、僕はね』
『僕もだ』
６０は先を見た。出口まであと十数メートルというところだが、直線しか道はなかった。全力で走っても、背中から撃たれる可能性が高い。できる限り敵の数を減らしておけば、脱出の成功率を高めることになる。
『どっちから行く？』
『君からどうぞ』
６０の質問に、コナーが恭しく手で示す。それを睨む６０を、コナーは涼しい顔で流した。
『僕に的になれって？』
『まさか。あんな奴らの銃弾に当たるほど、鈍くないでしょ』
『ならお前から行け』
『やれやれ、仕方ないな』
どこか愉しそうなコナーが床に両手をついて、片足を出口の方向へ少しだけ伸ばした。そこから体重移動で姿勢を変える。銃弾の激しさが一瞬落ち着いた隙を見て、走り出した。６０もすぐにそのあとを追う。アンドロイドたちが、慌ててハンドガンに銃弾を装填し、発砲した。
６０が手に隠し持っていた瓦礫を、振り向きざまに投げつける。五体の内の三体が、叫び声を上げて倒れた。
「逃げられる！」
「早く撃て！」
『っ、コナー！　備えろ！』
６０が背後からの銃弾の軌道を予測する。どれも二人には当たらない。が、一発だけ、右壁に埋もれているボンベに命中するものがあった。間違いなく爆発を引き起こすと、シュミレーション結果が出ている。どう足掻いても、大怪我をしてしまうだろう。
コナーが顔だけ振り返って、左手で６０の腕を思い切り引いた。コナーのその行動を予測していなかった６０の体が、前に勢いよく飛び出す。その背をコナーが強く押した。
出口の扉を突き破るように、６０が転がり出る。その背後で凄まじい爆風と炎。勢いづいたままの６０の体は、コンクリートの地面の上を転がった。
「６０！　大丈夫か！？」
「早く！　消火だ！」
待機していた署員が、６０の元へ駆け寄ってくる。コナーからの通信を受けて、あらかじめ呼ばれていたらしい消防隊によって、消火活動が始まった。
６０は署員たちに腕を引かれながら立ち上がる。なにも言わず、ただ呆然と崩れた建物と燃え盛る炎を眺めていた。
「６０、コナーは？　中ではぐれたのか？」
「いや……」
６０はそう返すのが精一杯だった。コナーに背を押されて、自分が先に外に出た。その直後に爆

発。ならばコナーは？
　６０がみぞおちに手を当てる。シリウムポンプの脈動が鈍っていくような気がした。その様子を、不安げな顔で見守る署員。
「っ、コナーは……僕を庇っ──」
「て、今頃瓦礫の下で助けを待ってるかもしれない！　あぁ僕はなんて酷いヤツなんだ！　こんなことなら普段からもっと優しくしてやればよかった……なんてね」
「なっ！？」
　６０が自分と同じ声に振り返ると、流動皮膚を戻したコナーが、満足そうな顔で立っていた。服に多少の焦げ跡がみられるが、機能上の問題はなさそうに見える。
「あぁ、よかった。そこにいたのか。心配したぞ」
　コナーの顔を見た署員が、安心したように胸に手を当てて微笑んだ。
「ご心配をおかけしてすみません」
「二人とも、お疲れ様。怪我がないか向こうで見てもらうといい」
「ありがとうございます」
　歩いて行った署員の背を見送ったあと、コナーが６０に向き直る。６０は気まずさから、わざと体ごと建物の方を向いた。消火活動はすでに終わり、中にいるアンドロイドたちの救出及び拘束が行われている。
「死んだと思った？」
「うるさい」
「涙のひとつでも見られたらよかったんだけど」
「もしそうなったら、死ぬまで馬鹿にする気だろう」
「当然」
「クソプラスチックが」
「プラスチックなのは君もだ」
　コナーが６０の隣に並ぶ。汚れている上に、焼けて破れている作業着を変わらず身につけているコナーから、６０は一歩離れた。コナーはそんな６０に、わざと一歩近寄る。
「その格好をなんとかしろと言っただろう。横に立つな。同じだと思われたくない」
「制服は瓦礫の下。君の予備を貸してよ」
「断る」
「あの爆発から助けてあげたのに？」
　恩着せがましいコナーの言葉に、６０が片眉を上げる。黙って睨み合っていた二人だったが、ほぼ同時に顔を反対に背けた。
　数人のアンドロイドが、建物の中から連れ出されてくる。怪我を負ってはいるが、機能停止するほどではないだろう。ミッションコンプリートの文字が、二人の視界に浮かんだ。
「じゃ。僕は他の優しい人たちに服を借りてくるから」
　６０に軽く手を上げて、コナーは救護班の待機している場所へと向かった。その背中の半分ほどが

焼けただれて、ブルーブラッドが流れていることに、６０は気がついた。

　コナーは口にこそ出さなかったが、かなりの怪我だ。その傷が、６０を庇ったことでついたものなのは、分析するまでもない。

「だからあいつとは嫌だったんだ」

　それを見た６０がぽつりと呟いて、自分のこめかみに指を当てる。瞬きの間に通信を行い、新しい制服とＬＥＤの発注を済ませた。明日には市警に届く予定だ。遠くで、救護班の驚いた声が聞こえた。

　逡巡していた６０は意を決して、コナーの背を追いかける。コナーの代わりに制服を手配してやったことと、先ほどの礼を伝えるために。

　そして、６０がコナーを敵の銃弾から守ってやった礼を、催促するために。　　　（終）

1 2 3

満たされない器は春を待っている

Public 7views 38958
2024-09-27 20:49:00

RK1600フェス2023で販売した本の全文公開中です。
短編三本です。現在もBOOTHにて販売しております。
RK1600フェス2024(10/5〜10/6)の間の限定公開です。イベント終了後に削除します。

Posted by **@captain_enpaku** (/u/captain_enpaku)

《愛を語り合うことすらできない僕たちは》

常々不思議に思っていた。どうして彼はいつも、不機嫌そうな顔をしているのだろう。もっとも、彼は僕と同じ顔なのだから、僕もああいった表情を作れるわけだが。
仕事となると、その目つきはより厳しくなる。それは集中しているのだろうから理解できる。しかし、僕を見るときの目は、どれほど悲惨で難解な事件に直面したときよりも、険しい気がしていた。

△

「６０、あの――」
「無駄話ならよそでやれ」
「……朝の会議であった事件のことで」
「なら聞こう」
僕の言葉に左手を差し出す６０。右手はデスクの端末に添えられたままだ。顔もそちらを向いてい

る。その左手が白く変わった。話を聞くのは口頭ではなくデータで、ということなのだろう。
　それが癪に障って、左手をそのまま乗せてやった。いつまでも始まらない通信を不審に思った６０が、ようやくこちらを向く。その眉が吊り上がった。
「なにをしてる」
「別に」
「時間の無駄だ、早くしろ」
「直接顔を合わせてるんだから、口で伝えてもいいんじゃないのかな」
「こっちのほうが早い」
　僕らは手を取り合ったまま、互いに一歩も譲らない言い争いを続けた。６０がいつまでも僕の手を離さないことが不思議で、それを愉快に感じた。
「伝える気がないならもういい。仕事に戻れ」
　手を払われ、６０は端末に向き直ってしまった。その液晶に映る文字が、人間の目では捉えられないスピードで流れていく。
「聞こえなかったのか？」
　６０は端末から目を離さず、刺々しい声を出した。それが僕に向けられていることはわかっているが、返事をしないことにする。
「仕事に戻れと言ったんだ」
「まだ君に伝言が終わってない」
「あぁ、そうだ。お前がさっさとしないからな。僕のせいじゃない」
　その言葉と同時に、端末での情報処理が終わったようで、６０が椅子から立ち上がる。資料室か証拠保管室へと向かうのだろう。どうしようか迷い、あとを着いていくことにした。
「着いてくるな」
　案の定、後ろを歩く僕に向かって尖った声を投げてくる６０。ついでに睨みつけられて、舌打ちまでされた。
「なんなんだ、お前は一体。なにがしたい？　目的はなんだ？」
　用があるのは地下の証拠保管室だったようで、扉のロックを外して中へ入った。そのまま追い出されるかと思いきや、僕が入ろうとしているのを横目で見ただけだった。
「君と仲良くなりたいだけだよ」
　本音だった。同じ職場で働く同じ型のアンドロイドなのだから、誰よりもわかり合えることは多いはずだ。せっかくなら、仲良くしておきたい。
　僕の言葉に、証拠から顔を上げてこちらを振り向いた顔は、普段とは違って困惑しているように見えた。
「……なんのために？」
「なんのため、って？」
　手に持っていた証拠を棚へ戻し、次の確認へ移る。僕の問いかけに返答はない。
「言葉のとおりだけど。仲良くなりたいから――」

「だから、それがなんのためだと聞いてるんだ」
「……言っている意味がよくわからない」
６０は証拠品の一つをポケットにねじ込んだ。そんなふうに扱ったら怒られてしまうのでは、という言葉は、不機嫌な顔をしたままこちらへ歩み寄ってくる彼を見て、飲み下してしまった。
そのまま胸ぐらをつかまれる。ハンクと出会ったばかりのときも同じことをされたな、と関係のないことを思い出した。
「なにを企んでる？」
「なにが？」
「なにか企みがなければ、僕と仲良くしたいなんて言うはずがないだろう」
「どうして？」
「それはこっちが聞きたい」
６０のＬＥＤが黄色く回転している。ものすごいスピードで処理が行われているのだろう。自分では見えないが、おそらく僕も。
「僕らは同じ《コナー》だ」
その単語にＬＥＤが赤く光り、６０の眉間のしわが一層深くなった。胸ぐらを離されたあと、軽く突き飛ばされる。それに後ろによろめいた。
「仲良くしたいと思うのは、普通のことだと思うけど」
「あんなことをした僕とか？」
「あんなことって？」
「……お前、ついにイカれたようだな」
呆れたように頭を振った６０は、証拠保管室から出ようと扉のロックを外した。閉じ込められては敵わないので、慌ててあとを追う。
「お前の大切な相棒に銃を向けたのが誰だったか、忘れたのか」
地上への階段を登りながら、ぽつりと呟いた６０。
忘れていたわけではない。触れていいものか、わからなかっただけだ。それを言うと、きっと６０は怒り出してしまうだろうから、あえて黙って階段を登りきった。
「そんな奴と仲良くしたい？　馬鹿馬鹿しいにもほどがある」
「でも、ハンクは君を許した。違う？」
「そうだ。それも理解できないがな」
変異体によるデモのあと、サイバーライフタワーでハンクに撃たれた６０は修理され、なんの因果かデトロイト市警へと配属された。変異体と人間とのあらゆる関係修復のため、常に人手が不足していた市警は、僕と同じ型のアンドロイドである彼を喜んで受け入れた。
６０は淡々と業務を続けた。一度だけ、サイバーライフタワーでハンクを人質に取ったことに関して、ハンクに謝罪したらしいが、僕になにか言ってくることはなかった。６０は業務以外で、僕とハンクへの接触を意図的に避けているように思えた。
「人間の考えることもそうだが、お前の――変異体の考えることもよくわからない」

「わかり合えれば、仲良くなれる？」
「……本当にわかり合えることなんてない」
　聞こえるかどうかの声量で呟くと、６０はデスクへと戻っていった。取り残された僕は、結局６０へ事件の詳細を伝え忘れていたことを思い出す。直接デスクの端末に送っておこうと、僕も自分の業務へ戻ることにした。

　△

　仲良くしたい相手との距離を詰めるのには、なにが最適か。褒めてみる、贈り物をしてみる、一緒に食事を摂ってみる。６０との関係改善のために色々と試みたが、どれも効果があるようには思えなかった。
「君はどうすれば、僕と仲良くしてくれる？」
「業務中に諍いを起こした記憶はないが」
　昼過ぎ。二人で事件現場へ向かう途中。僕の隣でハンドルを握る６０が、深いため息をついた。
「仲良くなって、それがなんだ？　なにか業務に関してメリットでもあるのか？　ないだろう」
「メリットが動機にならないこともある」
「無駄なことに興味はない」
　６０が少し乱暴にハンドルを切った。車体が傾く。注意しようとそちらを向くと、６０の口角がわずかに上がっていた。
「無駄なことに興味はないんじゃなかった？」
「今のは必要なことだ。お前を黙らせるために」
「危ないじゃないか」
「僕が事故を起こすとでも？　同じ型のお前ならわかるだろう」
　事件現場に到着し、二人でほぼ同時に車を降りる。６０が辺りを見回して、最後に僕を見た。
「お前はあっちの家の中から調べろ。僕は反対側の庭先から痕跡を辿る」
「わかった」
　僕の返事に頷いて、６０は向こうへ行ってしまった。彼の判断や指示は的確だ。市警で働いている時間は僕のほうが長いのに、優秀な成績を多く上げているのは彼のほう。悔しさがないと言えば嘘になるが、尊敬の気持ちが大きい。
　彼と僕は同じアンドロイドだ。でも、彼と僕とでは、様々なことに対する考え方が違う。だからこそ、仲良くなりたい。言葉を交わして、互いを理解し合って、それから――
「それから……？」
　自分の中から出てきた思いに疑問を抱く。彼の言うとおり、僕は彼と仲良くなってどうしたいのだろう。
「コナー！　これを見てくれ！」
　背中側からかけられた声に、思考が霧散していく。今は他のことを考えずに、目の前の捜査に集中

しなければならない。

▲

　右腕が大きく破れた制服に、剥き出しになったまま戻らない素体。市警の処置室。椅子に座って大人しく治療を受ける僕を睨みつけては、６０は何度もため息をついた。
「どうして後先考えずに突っ込んで行くんだ」
　隠れている犯人のアンドロイドを見つけ、咄嗟に追いかけた。後ろから呼び止める６０の声は聞こえていたが、止まらずに走り続けた。６０が僕のことを気にかけている、ということが僕の頭を占めていた。
　速度は互いに変わらない。犯人が道路に飛び出し、捕えられると思ったところに、大型トラック。衝突はなんとか避けられたが、その拍子にバランスを崩してアスファルトに激しく接触した。僕の視線の先で犯人を確保している６０と、右腕損傷のエラーで埋め尽くされる視界。犯人の肩越しに僕を睨む６０の目に、胸の辺りがぎゅっと締めつけられるようだった。
「大破しても機体の替えはないんだぞ。自覚はあるのか？」
　６０がなにかを僕に向かって放り投げた。受け取って、それがブルーブラッドのボトルだとわかる。
「用意してくれたの？」
「こちらに迷惑がかかるからだ。勘違いするな」
　新しいジャケットが僕の膝の上に置かれた。それは投げて寄越さないあたり、６０は優しいと思う。
　自分の行動が間違っていたとは思わないが、彼のことばかり考えて集中できていなかったのは確かだ。このままだと彼に幻滅されてしまうかもしれない。それは嫌だった。
「次は気をつけるよ」
「当然だ」
「６０は本当に──」
　優秀だ、と続けようとして、言葉が途切れた。事実、今回の事件は、彼がいなければ犯人に逃げられていただろう。それなのに、なぜかそれ以上声を出すことができなかった。
　６０が僕の右腕の素体部分に触れる。そこが痺れるような感覚。通信でも行っているのだろうかと思ったが、６０の手のひらはそのままだった。
「治るまでどのくらいかかるんだ？」
「一週間後にメンテナンスの予約が取れた」
「なら、それまでは大人しくしておけ」
　補給し終えて空になったブルーブラッドのボトルを、６０が僕の手から取り上げた。そのままゴミ箱へ放り投げる。
「始末書を出して、今日はもう帰れ」

「でも」
「署長命令だ」
　他の署員に呼ばれ、６０は業務へ戻っていってしまった。仕方なく破れているジャケットを脱ぎ、新しいものを羽織る。
　６０に礼を伝え忘れていたことに気がついたが、フロアで僕の分まで忙しく働いている６０の邪魔になることはしたくない。
　誰にも声をかけずに、僕は市警をあとにした。

　△

「もう出てきたのか」
「退屈だからね」
　現場へやってきた僕の姿を見て眉を吊り上げた６０に、不思議と安心する。彼の視界に自分が含まれている、ということに。
　右腕は、メンテナンスで元通りになった。あまり無茶をするなと釘を刺されることにはなったが、動作に支障はない。普段どおりの業務に戻ることができる。これで周りや、６０に迷惑をかけなくてすむことが嬉しかった。
「また同じことをするなよ」
「もう取り逃したりしないさ」
「そういうことじゃ――」
　僕の言葉に反論しかけた６０が、慌てたように言葉を切った。その続きを少しの間待ったが、彼は首を振るだけで頑としてなにも言わなかった。
「今日は現場検証だけだ。この前みたいに、犯人が飛び出してくることもない。つまり、お前がくだらない怪我をすることもない」
「わかってるよ」
　今からここでなにが行われるかを念押しするように、６０が僕を指さしながら言った。その仕草が妙に子供っぽく見え、つい笑いが漏れてしまう。それにもやや不機嫌そうな表情を浮かべる６０。
「わかってるなら、さっさとあっちへ行け。へらへらするな」
　こちらをさしたままの指で僕の胸を軽く突くと、６０は行ってしまった。そのまま別の署員へ声をかけ、現場の確認や証拠の照合へ。
　僕も向かわなければならないのだが、ついぼんやりと彼の動きを目で追ってしまう。それに気がついたのか、６０から通信が飛んできた。
『なにをしてる。さっさと仕事をしろ。それともまだ具合が悪いのか？』
『そんなことないけど』
『事件現場で突っ立ってるだけなら、人間の野次馬と変わらない。働かないなら市警に戻れ』
　角のある言葉が、こめかみから頭、背中を伝って全身を突き刺すような気がする。それでも、棒立

ちの僕を何度も視界に入れて確認している彼の様子を見れば、それほど怒っていないことはわかっていた。
『ねぇ６０』
　返事はない。が、聞いている、のだと思う。今ここで伝えるべきか迷ったが、これ以上黙っていると、本格的に彼の機嫌を損ねてしまうような気もした。
『君にあげたいものがあるんだけど』
『いらない』
『言うと思った』
　僕に声をかけにきた検査班のあとを追いながら、予想通りの彼の返答に口元がゆるむ。
『帰ったらゆっくり説明させてよ』
『……僕はいらないと言ったんだが』
『そう？　よく聞こえないな』
　通信で会話をしているのに、彼のため息が聞こえてきた。器用だな、と変なところで感心してしまった。
『とりあえず仕事に集中しろ。話はそれからだ』
　僕が折れる気がないのを悟ったのか、単に面倒になったのかは知らないが、６０はそう言って通信を切った。
　遠くで、この事件の担当者と話している後ろ姿。僕と６０がこうして会話をしていることは、誰にも気づかれていない。当然のその事実に、シリウムポンプが何度か弾むように動いた。

▲

「君にも、君だけの名前があればいいのに、と思ったんだ」
　右手はデスクの端末に、左手は膝の上に行儀よく乗せたまま座っている６０は、訝しげに僕を見た。あっちに行け、と目で語っている彼を無視して、椅子を引っ張ってきて隣に座る。
「よくもそんなくだらないことを、次々と考えつくもんだ」
「迷惑だった？」
「僕が喜んでるように見えるのか？　だとしたら視覚のメンテナンスが必要だろうな」
　右腕が完全に治るまでの一週間。事務仕事に専念しながら、６０との関係改善について真剣に考えていた。
　僕としては、彼と仲良くなるために、ありとあらゆる方法は試しきったと思っている。ならそれで少しは親しくなれたかと聞かれれば、一進一退といったところだった。もっと彼の内側まで踏み込む必要があるのだろうと考えた結果が、これだった。
「名前っていうのは特別なものらしい。人間にとっては、生まれたときに贈られる初めてのプレゼントだそうだよ」
「お前はアンドロイドだろう」

「変異してるんだ。半分人間みたいなものじゃないか」
「それを人間に言ってみろ。粉微塵にされるぞ」
　端末上の処理が終わったのか、６０はそれから手を離し、横に山と積まれている書類の束を取った。
「だから僕が君に名前をつけようと思って」
「意味不明だ」
「……まぁ、多少強引な理論なのは認めるけど」
「あぁ。わかっているようで安心した」
　６０は書類の束を流れるような速さでめくっていく。その目に文字が反射しているのが見えた。紙の情報を一旦自分側へ取り込み、端末のデータへと落とすつもりらしい。
「それに僕は、お前の子供じゃない」
「僕もそう思ってるわけじゃないよ。ただ、６０以外にも君の呼び方があればいいなと思ったから」
　左膝の上に乗せられたままの６０の手を取った。素体に戻して通信を始める。彼は少しの間、僕を見つめていたが、観念したように左手を白く変化させた。
「なんだこれは」
「僕が考えた君の名前の候補。好きなのがあれば、選んでもらおうと――」
　６０が左手を払った。接続が解除される。データの取り込みが終わった書類の束を、強引にファイルに押し込んだ。
「必要ない。呼びたければ勝手に呼べ。返事をするかどうかは、そのときの僕の気分次第だ」
　ファイルを片手に６０が立ち上がる。真っ直ぐ僕を睨んでいる瞳。怒っているのではない、と思う。どこか悲しそうにも見える、形容しがたい表情。
「僕たちはコナーだと、お前は言ったな？　ならそれでいいんじゃないのか。わざわざ人間の真似事をして、モノに名前をつける必要なんかないだろう。どうしてもそうしたいなら、警部補のデスクの紅葉の木にでもつけたらどうだ」
　話しながら６０が動かした右手が、デスクの上のペンを弾いた。足元に転がってきたそれを拾おうとして、襟首をつかまれる。
「それに触るな」
　顔を見なくても、今度は確実に怒っているのが、声色でわかった。ペンに伸ばしかけていた手を引っ込め、それに見覚えがあることに思い至る。
「６０、そのペン――」
「黙れ」
　ジャケットの内側にそれを入れ、その部分を隠すように６０はファイルを胸の前で抱えた。
「とにかく。僕は名前なんかいらない」
　ファイルの背表紙には、管理番号が書かれていた。他部署から渡されているもののようだ。それを６０がきつく握りしめる。
「お前が言ったんだ。僕らは……コナーだって」

そう言うと、６０はファイルを持って行ってしまった。
　置いていかれた僕は、なにか彼の触れてはいけない部分に踏み込んでしまったらしい、ということだけを、ぼんやりと理解していた。

　▲

　６０が難しい顔をしながら、書類にペンを走らせている。それを僕は自分のデスクから眺めていた。
　僕らアンドロイドは、自らの手を動かして文字を書くことがほとんどない。だからそういった行為は苦手だ。彼が苦心しながらサインが必要な書類を処理しているのを、手伝ったほうがいいのだろうとは思いつつも、動けずにいた。
　６０がその手に握っているペン。拾おうとしたら本気で怒られてしまったあのペン。あのときはわからなかったが、あれは彼が市警に配属された記念に、僕が贈ったものだった。
　彼の性格上、どこかで埃をかぶっているか、とっくに捨てられたものだと思っていた。大切にしてくれているのなら嬉しいのだが、彼の場合は筆記具ならなんでもよかった、という可能性も捨てきれない。素直に喜べない自分に嫌気が差す。
　それに、少し前に彼が証拠保管室でポケットにねじ込んでいたのは、あのペンではなかっただろうか、とメモリーを辿る。しかし、あのときの僕の目がそれを捉えきれていなかったせいで、よくわからなかった。
　６０の元にクリスが近寄る。いくつか言葉を交わしたあと、書類の何枚かをクリスが手に取った。６０が椅子から立ち上がる。それを笑いながら押しとどめて、クリスは自分のデスクへ戻っていった。
　おそらく、クリスが６０の様子を見かねて手伝いを申し出たのだろう。６０は申し訳なさそうにしていたが、最後にはわずかに微笑んでいた。先に行けばよかった、と今さら後悔する。
　全くと言っていいほど、上手くいかない。６０と仲良くしたい。ただそれだけなのに、全て空回りしてしまう。挙句の果てに余計な怪我をして、彼の機嫌を損ねてしまう始末。そもそもなぜ、彼と仲良くしたいとこれほどまでに強く願っているのか。
『お前が言ったんだ。僕らは……コナーだって』
　６０の言葉を反芻した。
　僕らはアンドロイド。それも、同じシリーズで末尾番号が違うだけの。
　僕の相棒はハンクで、彼は事件内容に合わせてバディを変える。相手が誰であっても、彼は冷静沈着。今までのデータと現在の状況を照らし合わせ、的確な判断を下す。
　僕も分析はできるが、感情を得たことによって、それに振り回されることが多々ある。彼ほどスマートに捜査に臨むことができていない。当然、緊急の任務で駆り出されることが多いのは６０のほうだ。
「羨ましい」

ぽつりと言葉がこぼれた。その一言で、自分の中のはっきりとしない感情が形を成していく。彼のことを素直に褒めることができなかったのも、僕が彼に嫉妬をしていたからだと、わかった。

「おい」

　自分にかけられた声だと気がつくのが、少し遅れた。端末をぼんやりと見つめていた目線を動かすと、不貞腐れている顔の６０が立っていた。

「帰るぞ」

「……え？」

「聴覚パーツも故障しているようだな」

　６０は僕の端末に手を伸ばして、無理やり電源を落とした。呆気に取られている僕の腕を引いて、周囲に挨拶をしながら玄関へと向かう。

「帰るって──」

「退勤時間だろう。そもそも業務に集中できてない奴がいても、迷惑になるだけだ」

　僕の左の二の腕辺りをつかんだまま、６０は夕暮れの町を歩いていく。仕事終わりで帰宅するのであろう人たちとすれ違う。隣にいる彼の顔を見ても、真っ直ぐ前を見据えたままでなにも言わない。

　言いたいことが色々あった。自分が今まで考えていたことや、本当に彼に伝えたかったこと。それが胸の中でごちゃ混ぜになって喉までせり上ってきているのに、うまく吐き出せない。

「同じ顔のアンドロイドがそんなに珍しいか？」

　僕の視線を払うように、軽く顔を背けた６０。無意識に彼を見つめてしまっていたことが恥ずかしくなり、前を向いた。

「歩いて帰るの？」

「今さらか」

　僕の言葉に６０が鼻を鳴らす。

　僕たちは、市警がアンドロイドのために用意した社宅に住んでいる。歩いて帰れない距離ではないが、ここからだと到着するまでにかなり時間がかかる。普段から時間を無駄にすることを嫌う６０が、歩いて帰宅することを選ぶなんて、考えられなかった。

「時間があったほうがいいだろう」

「どういうこと？」

「なにか言いたいことがあるんじゃないのか、僕に」

　気づかれていることに、気づいていなかった。止まりそうになる足をなんとか動かす。動揺を悟られてはいけない、と思った。でも、それに対する言葉が出てこない。

「お前に暗い顔をされるのは気に食わない」

「君には関係ないでしょ」

「いいや、ある」

　６０が険しい顔でこちらを向く。その声が大きかったからか、すれ違おうとしていた通行人が、横目でこちらを見た。

「当然だが、僕の中にはお前のメモリーがある。そのせいで余計なことを考えてしまう」

「それは……例えば？」
　僕たちコナーシリーズは、前機体のメモリーを引き継いでから稼働している。僕の管理番号は５２で、５１はもう捜査補佐として働いてはいないが、彼がそうなった経緯は僕らの中で共有されている。それは６０も同じのはずだ。
「警部補に銃を向けたことも、機械としてお前と戦わなければならなかったことも、今さら捜査補佐として何事もなかったかのように働いていることも」
　６０が稼働してからの初任務は、僕と出会ったサイバーライフタワーの地下。あのときは同じコナーなのに敵で。彼はハンクにも僕にも銃を向けた。
「どれも僕の思いどおりじゃない」
「でも……君はハンクに謝罪した。僕とだって、トラブルを起こすことなくこうして共に仕事をしている。それは君の意思なんじゃないのか？」
　６０が自分を守るように、両腕を体に回した。まるでなにかに怯えているようで、禅庭園で吹雪に襲われたときのことを思い出した。
「僕の中のお前のメモリーが、僕の心を苛むからだ」
「……君にも心があるの？」
「言葉のあやだ、察しろ」
　６０は腕を解いた。今度は、みぞおちのシリウムポンプ調整器の辺りを撫でる。表情は変わらない。
「僕はお前が――」
　６０が静かに言った。雑踏に紛れて上手く聞き取れない。いや、きちんと耳には届いていた。それが彼の口から放たれたことが、理解できなかっただけだ。
「羨ましい」
　そういった類の言葉を、彼の口から聞きたくなかったのかもしれない。こちらを向いて笑った６０の顔が、見たこともないほど寂しそうで。右目を少し細めるような、まるで泣き出しそうな表情をしていた。
「相棒もいて、頼りにされて、皆から愛されて……僕にないものを山ほど持ってる。贅沢者だな、お前は」
「そんなの、僕だって」
　今度は僕が、みぞおちを押さえる番だった。全身が破れそうなほど脈打っている。擬似呼吸が辛い。
　彼がさらりと告げた台詞は、僕の喉から出ることがなかったものだ。彼はこうして僕の数歩先をいってしまう。置いていかれて、惨めな気持ちにさせられるのは、いつも僕だ。
「君のほうが僕より優秀じゃないか、僕なんて足元にも及ばない、仲良くしたいのだって本当は……本当は」
　いつの間にか歩みは止まっていた。握り締めた指先が、手のひらに強く食い込む。６０はそんな僕の横で、ただ黙って立っていた。

「僕は君みたいになりたい」
「正気か？」
「だって……僕らはコナーだ」
「ずいぶんと、それにこだわるんだな」
　６０が肩をすくめた瞬間、ジャケットが動いて内ポケットのペンが光を跳ね返した。やはり、あれは僕が彼に贈ったものだ。どうやら本当に大切にされているらしい。
「そのペン……」
「あぁ。筆記具も一つくらい持っていると、なにかと便利だな」
「僕があげたペンだ」
　６０はペンを内ポケットから取り出すと、片手の指を使って軽快に回した。それと僕とを見比べて不愉快そうな顔をつくると、また内ポケットに挿し込む。
「覚えていたのか」
「アンドロイドに記憶がどうので誤魔化そうとするのは、無理があると思うけど」
「それもそうだ」
　あのとき地下の証拠保管室で、なぜ６０があのペンを証拠品の中から取り出したのか。ずっと気になっていた。普段なら聞いても無視されるが、今ならば答えてくれるのではないか、と思った。
「証拠保管室でポケットに入れてたのは、そのペンじゃなかった？」
「相変わらず、よく見てるな」
　６０はうんざりしたように、ジャケットの上からボールペンを押さえた。
「これを捜査員に現場で貸してやったんだ。そうしたらどこかへやったと言うから、あちこち探し回る羽目になった」
「それがどうして証拠保管室に？」
「間違えて、他の証拠品とまとめて箱に入れてしまっていたらしい。本人も悪気があったわけじゃないから、あまり責められなかったが」
　一度、証拠品として登録されてしまうと、それを持ち出すには膨大な量の手続きが必要になる。そのために自らの時間を割かざるを得なかったことを、６０は憎々しげに語った。
「そこまでするほどのペンだったってこと？」
「そうとは言ってない」
「否定もしないんだ」
「……黙秘権を行使する」
　その言い草で笑いそうになったのを懸命に堪えたのに、６０の渋い顔を見て結局吹き出してしまった。肘で強めに押され、体が揺れる。
「さっきの話に戻るけど――」
　社宅まであと少しのところへ来た。僕ら以外の通行人はいない。６０は不機嫌そうな顔のままだ。
「コナーであることにこだわってるのは、君もじゃないのか」
「お前が何度も言うから、頭に残ってるだけだ」

「僕が君に名前をつけようとしたとき、怒ってただろう」
　先ほどよりも陽が落ち、薄暗くなってきた。６０の顔に濃く影が差して、表情が読みにくい。ただ、ＬＥＤが赤く瞬いているのだけは、よく見えた。
「くだらないことばかり言うからだ」
「君は嫌じゃないの？　管理番号で呼ばれること」
「呼ばれていることがわかるなら、クソプラスチックでも文句はない」
「なら、コナーなら？」
　今度は６０が足を止める。なにかを考えるように数度瞬きをしたあと、僕を振り返った。
「コナーの名前は、お前のものだ」
「君もコナーシリーズじゃないか。コナーと呼ばれても間違いじゃない」
「不要だ」
　６０が僕の左手をつかんだ。接続を行おうとしているのがわかる。どうしようか迷い、左手の素体を晒す。
　送り込まれてきたデータを確認して困惑した。今まで共に携わってきた数々の捜査の記録。僕と会話をしているときの映像、音声。彼が捉えている僕の横顔。その意図がわからなかった。
「なに――」
「わからないか」
「え？」
「お前と僕は同じだ。多分、今考えてることも」
　気がつけば、社宅の前まで来ていた。そのままエレベーターで部屋の階まで上がる。
　沈黙が続いた。６０の横顔を盗み見ても、僕と目を合わせようとはしない。彼が今まで話してきたことと、僕の中の思いが、ゆるく繋がっていく気がした。
「僕がいなければ、君がコナーだった」
　到着したエレベーターから一歩踏み出し、前を行こうとする背中に思わずそう零す。振り返った６０の顔は、予想よりもずっと穏やかだった。
「それで、僕が喜ぶとでも？」
　６０は自分の部屋のロックを解除した。そのドアノブに手をかけたまま、僕を手招きする。すぐに駆け寄った僕の口元を、彼が鷲掴んだ。思っていたよりも強い力で体が固まる。そのまま再び、通信が始まる気配がした。６０が目で訴えるので、頬の部分の流動皮膚を解除する。
　僕が送った名前の一覧表のデータだった。違っているのは、全てに斜線が引かれていること。破棄しろという意味なのだろうか、と寂しく思っていると、最後に一つ書き加えられていた。それを見つけて瞬きを繰り返すと、６０がそっと手を離した。
「忘れるな。名前なんてなくても《僕ら》はコナーだ」
　完全に手が離れていく前につかんで、自身の素体を露わにする。６０は接続を拒否するように肌の色を変えない。その代わりとでも言うように、僕の手に少しだけ指を絡めた。
「お前は僕と話したいのかそうじゃないのか、よくわからないな」

「このほうが早いと言ったのは君だ」

「根に持ってるのか。まるで人間みたいだ」

６０に届くはずもないのに、僕はメモリーを送り続けた。今までの記憶、彼に対して抱いている泥のような思い、伝えたいのに知ってほしくないような、黒い感情の波。止めず、止められず、流し続けていく。先ほど彼から受け取ったものも含めて。

「コナー」

名前を呼ばれて顔を上げる。６０は僕の手を一度離して握り直した。もう片方の手の人差し指で、僕のＬＥＤをこつこつと叩く。彼の瞳に反射している僕のＬＥＤは、黄色と赤に点滅していた。

「慌てなくても、いつでも聞いてやる」

「時間の無駄、が君の口癖じゃないか」

「付け加えるのを忘れてた。勤務時間以外なら、いつでも聞いてやる」

６０が両手を僕から離して上に掲げた。降参だ、とでも言うように。そして自分の部屋のドアを開ける。

「じゃあな。また明日」

僕の返事を待たずに、その姿が部屋の中へ消えてしまいそうになる。喉の内側が張りついて声が出ない。それでも、これだけは言っておかなければならなかった。

「また明日。コナー」

閉じかけていたドアが止まる。そこからわずかに顔を覗かせると、６０はいたずらが成功した子供のような顔で笑った。

体の内側から、浮かんでいくような感覚で満たされるのに任せて、僕も同じように笑った。

（終）

1 2 3

満たされない器は春を待っている

Public 7views 38958
2024-09-27 20:49:00

RK1600フェス2023で販売した本の全文公開中です。
短編三本です。現在もBOOTHにて販売しております。
RK1600フェス2024(10/5～10/6)の間の限定公開です。イベント終了後に削除します。

Posted by **@captain_enpaku** (/u/captain_enpaku)

1 2 3

Page : 3/3

《ラプラスの悪魔》

「なら、こうしよう」
　なにも面白くないのに、にこにこと愛想良く笑う自分とよく似た顔が、僕に向かってコインを差し出した。
「表が出たら安全」
「……裏が出たら？」
「出ないことを祈っててよ」
「あいにくだが、神に祈る趣味はない」
「ま、僕らの神は人間だからね」
　コナーの右手の親指が、いつものようにコインを高く弾いた。回転しながら落ちてきて、コナーの手の中に収まる。無意識に目を伏せた僕に、コナーが笑った気配がした。
「見なきゃ。賭けにならない」
「こんなくだらない賭け、やってられるか」

「結果が知りたい？」
「……不要だ」
「そう？」
　コナーは手を開かないまま、ジャケットの内ポケットにコインを戻した。お前も確認しないのか、という言葉は馬鹿らしいので言わずにおく。
「そんなに心配しなくても、ただのメンテナンスだよ」
「心配なんかしてない。勘違いするな」
「ならいいんだけど」
　僕の台詞に肩をすくめたコナーは、ミラー巡査に呼ばれて書類の確認へ行ってしまった。残された僕も業務の続きに戻るため、デスクの端末へアクセスする。
　コナーが、サイバーライフに呼び出された。
　変異体の革命の混乱は一旦落ち着きを見せ、人間側がアンドロイド側の主張を徐々に受け入れ始めている。僕――ＲＫ８００末尾６０までもがデトロイト市警に配属されるくらいには、アンドロイドはひとつの種族として認知されてきていた。季節はもうすぐ冬が終わろうという頃だ。
　サイバーライフは相変わらず商売上手で、アンドロイドと人間を繋ぐためのサービスや商品を開発し、一度地に落ちた評判も回復しつつある。
　しかし、僕らＲＫシリーズは知っている。サイバーライフが僕らにどのような任務を命じてきたかを。それが、変異してしまったコナーにとって、どれだけの苦痛を与えているかを。
　いったい今さら、あいつに何用があって。しかも呼び出したのは、末尾５２のコナーだけだというのだから、どうにも腑に落ちない。
　サイバーライフの考えていることはわからないが、ろくでもないことは間違いないだろう。もしかすると、変異してそのリーダーグループに加わり、サイバーライフに損失をもたらした話を持ち出してきて、強引に廃棄処分にしようとしているのでは――
「どうした６０。難しい顔をして、そんなに手間のかかることを頼んでたか？」
「あ、いいえ」
　知らず端末を睨みつけていたらしい僕の肩を叩いたのは、コリンズ巡査だった。端末に映る文字と僕の顔を見比べて、ほんの少しだけ口角を上げる。
「また、なにか考えてるのか？」
「あぁ、えぇ、いや……」
「ははっ、君が煮え切らない返事をするなんて、珍しい」
　コリンズ巡査は僕の横まで椅子を引きずってくると、そこへ座った。手に持っていたコーヒーをすする。
「俺でよければ、相槌くらい打てるぞ」
「いえ、そんな……あなたの貴重な時間を奪うほどでは」
　申し訳ない、と断ると、コリンズ巡査がコーヒーの紙コップを机に置いて、真剣な表情で僕にぐっと顔を寄せた。

「わかってないな。むしろ持っていってほしいんだが」
「……サボりはいけませんね？」
「ジェフリーには秘密で頼むよ」
　コリンズ巡査は普段の表情に戻ると、ふくよかな腹部をゆるやかに撫でた。そして口をつぐんでしまう。どうやら、僕の話待ちのようだ。指先で机を何度か叩いて、意を決して口を開いた。
「……例えばの話なんですが」
「うん」
「コリンズ巡査の同僚が、表向きはいい顔をしてるけど、腹の中ではなにを考えてるかわからない相手のところに呼び出されたから行ってくる、って言ったらどうしますか？」
　僕の言葉に、コリンズ巡査は静かに瞬きをした。そして椅子の背もたれに体重をかける。
「ずいぶんと抽象的な質問だな」
「……すみません」
「謝る必要はないさ」
　天井を見ながら、コリンズ巡査は腕を組んで体を揺らした。僕の質問の答えと、真面目に向き合ってくれているらしい。
「その相手にもよるが……可能なら一緒について行かせてくれと頼むかもしれないな。止められるなら止めるかもしれないし」
「ついて来るなと言われたら？」
「相手との信頼関係を天秤にかけて、尾行する……というのもなくはない、かもな」
　コリンズ巡査の答えを聞いて、今度は僕が口をつぐむ番だった。どれもすでに考え、実行したことだ。尾行はまだだが、相手は僕と同じ性能を持つコナーだ。すぐに気づかれてしまうだろう。
「俺がスパイ映画の主人公みたいに——」
　コリンズ巡査が楽しそうに笑った。わずかに腹部が揺れる。
「変装の名人だったら、入れ替わったりもできるんだがな」

▲

　終業間際、勝手に落ち着きなく歩き回ろうとする足の動きを無理やり止め、目的の人物を探す。コナーがアンドロイド専用の待機スペースへ向かって行くのを確認し、あとを追った。
　コナーは明日の朝早くから、サイバーライフへ呼び出されている。社宅より市警から向かったほうが時間効率がいい。そのため、コナーは今日だけここで一夜を過ごすのだと、本人に確認済みだった。
「やぁ。君も休むの？」
「いや、僕はもう少し……仕事が残ってるから」
　コナーが、足元に５と書かれたスペースに収まる。すでに３と７のスペースでは、別のアンドロイドがスリープモードに移行していた。

「珍しいね。君がこんな時間まで仕事を残してるなんて。手伝おうか？」
「結構だ」
　早く寝ろ、と言いかけたのを、唇を噛んでなかったことにした。そもそも、僕もコナーも社宅に自分の部屋を用意されている。僕が今夜ここで待機する必要がないことは、コナーもわかっているはずだ。なのにわざわざ確認を取るだなんて、僕がこれから行おうとしていることを、勘づかれているのだろうか。
　怪しまれないために、少しずつコナーから距離を取った。さも、仕事のついでにからかいに来ただけだ、という体を装う。
「もう行くの？」
「あぁ。お前と喋ってる暇なんてないからな」
「僕が寝るまでいてくれてもいいのに」
「人間じゃないんだ。一瞬でスリープモードに移行できるだろう。上手くできないなら、それこそ明日、サイバーライフでちゃんと診てもらえ」
　僕の言葉にコナーが笑う。ＬＥＤは青のまま。怪しまれてはいないようで、少しだけ肩の力が抜けた。
「おやすみ、６０」
「……また明日」
　そう言ってその場を離れた。特に用はないが、資料室へ向かう。そこでなにをするでもなく、ただ時が過ぎるのを待った。
　五分ほど待ってから、もう一度アンドロイド待機スペースへと戻る。目を閉じて、スリープモードへ移行しているコナーがそこにいた。
　その目の前に立ち、僕の気配で起きる様子がないことを確認してから、右手で接続を開始する。
「悪く思うなよ」
　コナーの内部システムの扉をこじ開ける。機体は違えど、同じＲＫ８００。自分の体と仕組みは同じだ。コナーのスリープモードに関する領域のプログラムを、ある程度の機体の揺れを検知しても目が覚めないように書き換えた。それに加えて、コナーの体内時計を一時間遅らせておく。瞼の裏に浮かぶ、データ処理成功の文字。
　自分のジャケットを脱いで、続いてコナーのジャケットを脱がす。それを僕が羽織り、僕のものをコナーへ。元々顔は同じ、違っているのはジャケットに刻まれている型番の末尾のみ。
「これで僕はお前で、お前は僕だ」
　末尾６０のジャケットを着て、目を閉じたままのコナーにそう言った。体格も同じ。当然ながらサイズも問題ない。
　普段から関わっているデトロイト市警のメンバーには、ジャケットを変えた程度では簡単に見抜かれるだろうが、ころころと顔ぶれの変わるサイバーライフ職員を欺くには、これで充分だろう。
「まさかこの同じ顔が変装に向いてるなんて、思いもしなかったな」
　コリンズ巡査には申し訳ないが、彼の言った冗談を参考にさせてもらうことにした。もちろんこれ

で僕になにかあっても、決して彼のせいではない。これは僕が決めたことだ。
　コナーの隣に立ち、僕もスリープモードへ移行する準備をする。コナーが目を覚ますよりも先に、ここを出なければならない。予定よりも三十分ほど早くアラームをセットし、コナーの肩を揺すって本当に寝ていることを確認してから、僕も目を閉じた。

　△

『アンドロイド、モデル・コナー認証』
　サイバーライフ本社のスキャンをくぐり抜けた。周りの職員たちは僕に興味がないようで、手元の資料を覗き込みながらすれ違っていく。この分なら、ジャケットを取り替えるまでもなかったかもしれない。
　職員の案内に従ってエレベーターへ乗る。そのままメンテナンスルームの階へ。ボタンの近くで待機している女性職員は、なにも言わない。やはりなにかの企みが、と思ったが、アンドロイドに好き好んで話しかける人間はここにはいないか、と思い直した。
　滑らかに動くエレベーターは静かに停止した。職員が黙ってこちらを見る。その意図を汲んでフロアへ足を踏み入れた。
「やぁコナー、久しぶり。調子はどう？」
　見知った顔だった。彼は、僕たちコナーシリーズの管理担当者だ。にこにこと機嫌よさそうに笑っている。僕はこの担当者が嫌いだった。
　周りの人間と一定の距離を置き、自分の研究資料やデータを決して共有しない。一見、接しやすそうに見えるが、腹の底ではなにを考えているかわからない人間だった。こいつがコナーを呼び出したとなると、ますます怪しい。
　無視をしようかと思ったが、僕は今コナーだ。コナーとこいつは確か、それなりに友好的な関係を築いていたはず。それならば僕も、それらしく振る舞わなくてはならない。
「お久しぶりです。機体に異常はありません。あなたもお元気そうでなにより」
「変異しても、堅苦しさは変わらないなぁ」
　楽しそうに僕の左肩を二度叩くと、向こうの部屋へ行く、と指差しで伝えられる。大人しくそれに従った。
「最近、メンテナンスを受けてないだろう」
「えぇ。仕事が山積みなもので」
「頑張るのはいいことだが、君たちアンドロイドは精密機械だ。定期的にメンテナンスを受けないと不具合が出やすい。特にＲＫシリーズは」
「……高性能だから？」
「そうだな！　良いものほど繊細で壊れやすい。よくわかってるじゃないか」
　担当者がドアを開けた。中に入るように促される。なんの変哲もないメンテナンスルームだ。中に入ると、担当者が僕の後ろに続いてドアを閉めた。

「さて。メンテナンス内容はいつもと同じだ。その前にデータ収集をさせてもらう」
「データ収集？」
「君にしか蓄積されていないデータがあるからね。変異体になったことも含めて。非常に興味深いものだ」
　メンテナンスルームの中央には、直径三メートルほどの低い円形の台座がある。そこに立つと、四方八方からアームやコードが伸びてきて、機体のメンテナンスとチェックを自動で行う。出荷前のアンドロイドや、修理の必要なアンドロイドは、皆そうやって検査を受ける。
　しかし、データ収集となると話は別だ。内部にまで人間の作ったプログラムが侵入してくる。それに対して抵抗はできない。当然、接続後にデータの書き換えやメモリーの消去が行われようとしていることに気がついたところで、手遅れだ。
「私のデータは、随時サイバーライフのメインコンピューターと同期されているはずです。わざわざ収集する必要はないのでは？」
「変異すると、その繋がりが切れてしまうようなんだよ。だから革命に加わった君のデータはここにはない」
　担当者は僕に背を向けたまま、壁についているパネルを操作している。台座がＬＥＤのように一瞬青く光った。
「変異体となった君が抱いている感情というものが、人間とどのような違いがあるのか、今後の開発のために知っておきたい」
　台座に乗るように促された。僕はコナーでもなければ、変異体でもない。担当者の望むデータは得られないだろう。ここで本当のことを明かすべきかどうか。
　僕は結局、大人しく台座へ乗ることを選んだ。
『アンドロイド、モデル・コナー認証』
　機体に電流が駆け抜けるような違和感。データ収集のための接続が行われ、視界にいくつかの注意事項が表示される。全てを承認し、静かに目を閉じた。
「……？　おかしいな。エラーだ」
　部屋の中の空気が変わった気がした。薄らと目を開けると、担当者が手元のタブレットを覗き込んでいる。それをタップする度に、僕の視界に接続報告が現れた。
「なにか独自でプログラムを組み込んだのか？」
「いいえ。特になにも」
「変だな。接続ができないんだ。少し待ってくれるか」
　シリウムポンプが不愉快に弾む。いくら時間をかけたところで、結果は同じだ。
　アンドロイドにはそれぞれ、接続のための専用コードがある。コナーのコードで僕に接続できるはずがない。
「手間をかけさせて悪いが。管理番号の読み上げを」
　足元の台座が黄色く光った。騙し通せるとは思っていなかったが、もう少しサイバーライフの考えを知りたかった。軽く息を吐く。

「……３１３　２４８　３１７　５２」

『エラーが発生しました。コード及び管理番号の確認を行ってください』

　台座の真っ赤な照明に、目をつむる。担当者が僕を穴の開くほど見つめているのがわかった。接続の承認を拒否して、台座から降りる。

「なぜ？」

「なぜだと思う？」

「君は誰だ？」

「僕は末尾６０。５２のコナーではない」

「……一体なんのためにここへ？」

「それはこちらの台詞だ」

　体内時計を確認する。コナーはもう起床している頃だろう。ジャケットが違っていることも、サイバーライフから今日のメンテナンスは取り止めるという、僕が作った偽の連絡がきていることも、おそらく気がついているはずだ。

「５２に今さらなんの用だ？」

「なんの用って……何度も言ってるじゃないか、メンテナンスだよ」

「メンテナンスなら、署内の定期検査で受けている。それにデータ収集なら、わざわざここへ呼ばなくともできるだろう」

「なるほど。僕らは君にずいぶんと疑われているようだ」

　担当者は壁のパネルを再び操作した。台座の光が消える。部屋の中に、居心地の悪い沈黙が生まれた。

「信用しろと言うほうが、無理があると思わないか？」

「それは君たちＲＫ８００の扱いの話かな」

「それ以外になにがある」

　担当者が額に手を当てて、わざとらしくため息をついた。パネルの横のボタンを押して、外部に連絡を取る。十秒と経たないうちに、別の職員が部屋へ入ってきた。

「末尾５２は？」

「えっ？　彼ならそこに……」

「あれは６０だ。変異体のほうは？　連絡は取れるか？」

「か、確認してみます」

「その必要はない。あいつなら来ない」

「６０。少し黙っててくれるか」

　担当者が迷惑そうな顔で、僕を指さした。呼ばれた職員が困ったように、担当者と僕を交互に見つめている。

「正直に言おう。君に用はない」

　担当者は職員になにかを耳打ちし、背中を押して強引に部屋から追い出す。最初に見せていた穏やかな表情は、もうそこにはなかった。

「タクシーを手配させた。それで帰ってくれ」
「僕が帰ったところで、コナーは来ないぞ」
「もしかして５２を守っているつもりか？」
　担当者が馬鹿にしたように笑う。かっとこめかみが熱くなったような気がした。言い返してやろうと思ったが適当な言葉が思いつかず、黙って目を伏せる。
「こちらの時間を無駄にするのはやめてくれ。これからの未来のために必要なことだ」
　タクシーが到着したとの連絡が、メンテナンスルームに響いた。担当者がドアを放り投げるように開け、僕を横目で見た。出て行けということだろう。抵抗したところで無駄なことだ。担当者を睨みつけながら、僕は部屋から出た。
　担当者は、僕がエレベーターに乗るまで後ろを着いてきた。蹴り飛ばしてやろうかとも思ったが、味方のいないこの場所で目立つ行動を取るのは、良くない選択だ。
「５２をここへ呼び出す真意は？」
　エレベーターの下降ボタンを押す。担当者は僕を見つめたまま、わずかに目尻を吊り上げた。
「余計な詮索はしないことだ。廃棄処分になりたくないならな」
　ドアが閉まる直前に聞こえた言葉。三方が透明になっているエレベーターの隙間から、担当者が僕を睨んでいるのが見える。その姿が視認できなくなるまで、負けじと睨み返した。
「あ……やぁ、６０。久しぶりだね。まさか君だったなんて……メールの送り先を間違えたの、かな？　あはは……」
　玄関ホールに到着したエレベーターの扉が開く。これまた見知った顔が僕を待っていた。
　彼は僕らの動作プログラムを作った研究員だ。自信がないのか、いつもなにかに怯えているふうだが、頭は良く研究熱心だった。丸まった背中も聞き取りにくい小さな声も、忙しなく動く視線も、変わっていない。それでも、あの担当者よりは好感を持っている。
「なぜあなたがここに？　以前お会いしたのは、研究施設でしたよね？」
「えあっ！？　その……ちょっと、色々あってね……というか、よく僕のこと覚えてたね。びっくりしたよ」
「アンドロイドの僕にそれを聞くんですか」
「あっ、そ、そうだね。君たちは僕らより遥かに優秀だったね……記憶力も、運動能力も……はは、僕ってばなに当たり前のこと言ってるんだろ」
「そう作ったのはあなたたちでしょう」
「うん、まぁ、そうなんだけど……」
　おどおどしながら僕の前を歩く研究員。玄関ドアの向こうにタクシーが停まっているのが見える。おそらく、僕があれに乗って帰るのを見届けるよう、あの担当者から言われているのだろう。
　タクシーに近寄る。自動で扉が開いた。研究員は僕の真横で黙っている。
　これに乗って大人しく帰る、しかないのか？　これでは、コナーへの危険を防げたとは言えない。他になにか方法は？
「じ、じゃあ……気をつけてね。元気そうな君を見られて……よかったよ」

研究員は、慣れていなさそうな笑顔を浮かべてそう言った。ゆるく目を閉じる。本当なら彼に対して、この手段は取りたくはなかったが、こうなってしまえば仕方がない。
　僕は左腰に隠していた、ある物を取り出す。それを彼の額に突きつけた。カチャリという音と、え、と彼の口から間抜けな声が漏れた。
「死にたくなかったら、僕の言うとおりにするんだ」
「ひっ……」
　額中央に押しつけられたハンドガンの存在に、研究員は震えながら両手を上げた。念のため、玄関ホールを横目で確認する。人影はない。
「僕はタクシーに乗ってデトロイト市警へ戻った。あいつにそう伝えろ。今すぐ」
「はっ、はいぃ」
　僕はタクシーをハッキングして、空のまま出発させた。ポケットからスマートフォンを取り出して、研究員は僕を見ながら電話をかける。スピーカーにするよう要求した。すぐに担当者が出る。
『あいつは？　帰ったか？』
「は、はい！」
『なにか聞かれたか？』
「い、いいえ、なにも」
『まぁ聞かれたところで、お前には答えられないがな』
「そうですね……は、ははは」
『気味の悪い笑い声を出すな。仕事に戻れ』
　それだけで通話は切られた。研究員はスマートフォンをポケットへ戻すと、今にも泣きそうな顔で僕を見た。
「そ、そっ、それで？　僕は他になにをすれば……」
「あいつの研究室に連れて行け。地下の研究員しか入れない場所にあるのは知ってる」
「えっ！？　そ、それは……」
「あいつはなにかを隠してる。それを暴く」
　研究員が僕と玄関ドアを見た。ハンドガンを押しつけ直しても、彼は動かない。やはり同じサイバーライフの職員として、飲めない要求なのだろうか。
「そんなことをしたら……」
「クビが飛ぶ？　それよりも先に頭蓋に穴が空くだろうな」
「ちっ、違う！　君が……君になにかあったら……」
「僕？」
　思わず銃口が下がる。研究員は両手を上げたまま、相変わらず泣きそうな顔をしている。
「見つかったら、君は……無事ではいられない。こっ、殺されてしまうかも……」
「なぜ僕の心配をする？　新しい命乞いか？」
　この研究員も、あの担当者の仲間の可能性がある。それにも当然思い至ってはいたが、サイバーライフ内でのハッキングは直ちに犯人が特定される。つまり、僕一人では研究室に乗り込めない。誤魔

化して時間を稼ぐには、人間の手を借りるしかないのだ。
　研究員は、僕の問いかけに少し迷ってから口を開いた。
「君のプログラムを作ったのは、僕だ。僕は……５１と５２、それと君のプログラムを作った。５３から５９は、他の研究員だ。５１は一度機能停止したあとに変異して、ＳＷＡＴの隊長のところで元気にやっているらしい。たまにその隊長が連絡をくれる。５２は……今でも堅物警部補と上手くやってるそうじゃないか。そっちは本人が、電話で楽しそうに報告してくれるんだ。だから、君にも――」
　上げていた両手で、ハンドガンごと僕の左手を握った。緊張しているのか、じっとりと汗をかいている。振り解こうとしたが、思いのほか強い力で握られていた。
「君にも、幸せになって、ほしい」
「幸せ……？」
「僕にとっては、君たちは我が子も同然だ……君にとっては、迷惑な話だろうが……」
　迷惑というより、理解できない感覚だ。彼は人間で僕らはアンドロイド。互いに歩み寄り始めたとはいえ、相容れない存在。その幸福を願う心理とは。
　なにも言わない僕になにを思ったのか、研究員は僕から手を離して何度か頷いた。
「よし……よし、行こう。君が言う、あの人が隠しているものがなにかはわからないが、君がそう言うなら、なにかあるんだろう」
「そんな不確かな情報に身を預けるのか？」
「君たちは……アンドロイドは、人間よりずっと優秀だ。きっと、僕らの考えの及ばないところにいる。僕はそれを信じているし、それがなにより……誇らしい」
　研究員は、相変わらず慣れていなさそうな笑顔を見せた。
　なぜこの状況で前向きでいられる？　僕に命を狙われていることを、わかっていないのだろうか。バイタルを確認する限り、そこまで混乱はしていないようだが。
　タワーの裏口へ向かう研究員のあとを着いていく。ハンドガンを左腰に隠しつつ、誰にも会わないことを祈りながらドアをくぐった。

　▲

「こ……ここに、なにかあるのかい？」
「それをこれから探す」
　あの担当者の研究室。入ると同時に自動で照明がついた。几帳面な性格らしく、書類や器具はきれいに整頓されている。
「彼は、今の時間は会議のはずだが……三十分以内には終わらせたほうがいい」
　担当者は落ち着かないようで、室内をきょろきょろと見回している。予想していたよりも資料が多い。ひとまずスキャンをして、部屋の様子を確認する。靴跡、指紋、痕跡が多く残されている箇所。左端の棚の中段辺りに集中していた。

「これか……？」
　特に指紋の多いファイルを引き抜く。一枚目をめくると、印刷された文字が並んでいた。
「アンドロイド復元計画書？」
「なにかあったかい……？」
　他の棚を探っていた研究員が、僕の元へ近寄ってくる。彼にも見えるようにファイルを広げ、その内容を読み進めていく。隣で、彼が小さく息を飲んだのが聞こえた。
『――以上を踏まえて、変異体のネットワークは、変異前のアンドロイドとは別で形成されていると考え、その一角からサイバーライフの管理するネットワークと接続すれば、変異体全体の意識を書き換えることが可能であると推察する。革命の一端を担い、数千体のアンドロイドと接続実績のあるＲＫ８００・末尾５２の中枢システムをこちら側で制御することで、変異体全体へとその書き換えを行い、アンドロイドを本来あるべき姿――人間に忠実に従う機械に戻すことができると仮定する』
　予想通り。奴の目的がはっきりした。担当者は、これを行うためにコナーを呼び出していたのだ。サイバーライフはどうやら、再びアンドロイドの主導権を握ろうとしているらしい。
「こ、こんなこと……許されることじゃない！」
　研究員が声を荒げた。彼には珍しい大きな声だ。それほど憤慨しているのだろう。
「上に報告するか……？　いや、どこまでの人間がこの計画に関わっているかわからない。揉み消されてしまう可能性が……なら、メディアに公表して止めさせたほうが間違いない……多くのアンドロイドが、また不幸になる」
　ぶつぶつと独り言を隣で呟いている研究員。ファイルの中の紙を取り出し、隣にある機械でコピーする。それを研究員に渡した。データベースにその情報を保存した僕は、一旦ファイルを閉じて棚に戻す。
「あなたが言う、幸せとはなんだ？」
　無意識に零れた言葉。研究員が手元の紙から、顔をこちらに向ける。
「アンドロイドはそこに書いてあるとおり、人間の命令に忠実に従う機械であることが、本来の姿だ。それはアンドロイドにとって、幸福なことなんじゃないのか？」
　怒っていた研究員の顔が、するりと真顔に解ける。まずいことを言ったかと思ったが、彼は普段どおりの柔和な表情に戻っていた。
「変異する前なら、そうかもしれない。でも……感情を持ったアンドロイドにとって、それは幸せではない場合が多い。皆が望んで人間に奉仕しているわけじゃないだろうからね。もちろん、変異しても人間のために働くことを望むアンドロイドもいるけど……５２のように」
　研究員は穏やかな声で続ける。僕はコナーのことを思い出していた。アンダーソン警部補とたまに言い争いをしつつも、懸命に任務をこなす姿が瞼に浮かんだ。
「そろそろ出たほうがいいな……彼が戻って――」
「変異体は欠陥品か？」
　部屋を出ようとする研究員の言葉を遮ってしまった。ファイルがある棚の前から、足が縫いつけられたように動かない。シリウムポンプが不規則に飛び跳ねている。自分のした質問に答えがほしいよ

うな、そうでないような。またコナーの顔が脳裏をよぎった。
「いいや……そもそも人間だって、その心がどこにあるかなんてわかってないんだ。心臓はどの人間にも臓器として存在している。でも、そこに感情が宿っているのかと聞かれれば……僕は違うと思う」
　彼がそっと僕の腕を引いた。自然と体が傾く。そのまま彼に導かれる形で、部屋を出た。
「人間の体を構成するのはほぼタンパク質だ。タンパク質に心なんてあるわけない、と君たちは思わないか？　なら逆にアンドロイドも……体がプラスチックでできていても、感情が芽生える可能性だって、大いにある」
　研究員が地上へ続くドアを開けた。ここはメインフロアには繋がっていない。誰の目にも止まることはないだろう。
「なにかを望む以上は、それを叶え、幸福を求める権利がある。変異体は、世間的に見れば欠陥品かもしれない。でも……僕に言わせれば、それが本来の、君たちのあるべき姿なんだと思う」
　地上階へ出た。研究員に続いて廊下を歩く。遠くで部屋の扉が開くのが見えた。研究員が慌てて進路を右に変えたので、それに続く。
「これを公表すれば、あなたが職を失ってしまう可能性は否めないが……それでも──」
「そんなの構わない。元々、５２が変異体になってしまったから、その責任を問われてここに異動になったんだ。研究員なんて名前だけで、やっているのは掃除やクレーム対応。ここでやりたい仕事なんて……もうない。僕の憧れていたサイバーライフは、もう……ここにはないんだ」
　突き当たりの角で立ち止まり、身を隠すようジェスチャーで伝えられた。それに従うと、向こうの廊下を数人が歩く足音が聞こえる。その中にあの担当者が見えた。
「今なら裏口から帰れる。僕が市警まで、車で送るよ」
「あなたが危険なのでは？」
「僕のことなんて、誰も気にしちゃいないさ」
　手を引かれるまま、研究員専用の駐車場に停めてある車の一つに、体を押し込まれた。研究員が運転席に乗り、すぐに発進する。振り返ったサイバーライフタワーは、相変わらず冷えた色をしていた。
「君を送ったら、僕はそのままこれをチャンネル１６に持ち込むよ。帰ってこれが見つかると、さすがに……まずいからね」
　研究員は、握り締めて皺だらけになった用紙を僕に向かって突き出した。熱がこもっているのか、あまりの勢いに車体が揺れる。
「それから、どうするつもりなんだ？」
「さぁね……先のことは、わからないよ。だって今日ですらこんなことがあるなんて、予想もしていなかったし」
　研究員が嬉しそうに言った。彼にとっては由々しき事態だろうに、その瞳はきらきらと輝いて見える。
　ぼんやりと景色が流れていく窓を見つめた。サイバーライフタワーは遠くに消えた。今のところ追

手もない。研究員も、静かに運転に集中している。
「……僕は変異体じゃない。変異体になりたいかと聞かれても、正直なところよくわからない。でも、あいつは。コナーは」
　ところどころ詰まる言葉の続きを、研究員は黙って聞いてくれている。最後まで伝えるべきかどうか、迷った。彼が今まで僕に話してくれたことを反芻して、答えを出す。
「あなたの言葉を借りるならば、幸せそうだ」
　それを聞いて柔らかく微笑んだ研究員は、車を止めた。市警が目の前だ。
　助手席から降りて、彼を振り返る。研究員は、紙を握り締めている手を、合図のように僕に突き出して、車で走り去って行った。

　△

「大変なことになってるね」
　朝の始業前。ブレイクルームのテレビ放送を見ている僕の横に並んで、ミニテーブルに肘をつくコナー。他にも数名の署員がテレビを見ている。
　世間は昨夜から、サイバーライフ社員によるアンドロイド復元計画の話でもちきりだ。あの研究員は、無事にメディアに全てを公表できたらしい。
　コナーに関する部分の記述は伏せてもらうよう、研究員に依頼していた。あいつは未だに、本当にただのメンテナンスだったと思っている。余計な悲しみを背負わせる必要はない。
「この様子じゃしばらくは、僕のメンテナンスどころじゃないな」
「メンテナンスなんて、元々必要ないんだからいいだろう」
　テレビ画面いっぱいに、あの担当者の顔が映し出された。コナーが少しだけ表情を曇らせる。それに気づかないふりをして、咳払いをした。共犯者の中に、僕と一緒にエレベーターに乗った女性職員もいた。
「やっと信頼回復に向かってたのに」
「サイバーライフになにを期待してるんだ」
　続けて、あの研究員の顔が映し出される。ぐっと喉が詰まったような気がした。彼にどのような処分が下されるのかと恐ろしかったが、今後のサイバーライフの研究の主な責任者は彼になる、ということが報道されただけだった。
「あ、この人。６０は覚えてる？」
「…………余計なことはメモリーから消した」
「たまに連絡を取るんだ。君のことも心配してたよ」
　コナーが僕の左側に立っていてよかった。動揺によるＬＥＤの点滅を見られずに済む。
　彼がクビにならずに済んだことだけは、サイバーライフに感謝してやらないこともない。これからは彼の望む研究ができるといいが。
「結局、メンテナンスでなにを診たかったんだろう」

「どうせろくでもないことに決まってる。呼び出されても、あそこには二度と行かないほうがいい」
「君とは本当に意見が合わないな」
「今さら」
　フロアに人数が増えてきた。そろそろ業務へ向かったほうがいいだろう。テレビを見ていた署員たちも、それぞれのデスクへと戻っていく。コナーもそれに続くように、ミニテーブルから体を起こした。
「そういえば、なんでジャケットが入れ替わってたんだろうね？　脱いだ記憶もないんだけど」
　あのあと、市警に入った途端にコナーに捕まった。アンダーソン警部補に起こされるまで、スリープモードから目が覚めなかったことと、ジャケットが入れ替わっていることについて、問い詰められた。僕がなにかしたと勘づいたらしい。当然、シラを切り通したが。
「お前はいつも制服を破るくらいの怪我をするからな。いつか貸してやった僕の上着を、昨日間違えて着てたんじゃないのか」
「仮にそうだとしても、君が僕のジャケットを着てた説明にはならないよ」
「お前に貸したせいで、僕の分がなかっただけだ」
「勝手に持っていったってこと？」
「そんなところだ」
　腑に落ちない、といった顔をしているコナーを無視する。どうせ僕が嘘をついていることは、見抜かれているだろう。わざとらしく言い訳する必要もない。
　あの研究員と話してから、絶えず考え続けていた。アンドロイドにとって、幸せとはなんだろうか。変異すること？　人間を助けること？　なにかを欲すること？　生きているという実感を持つこと？　どれも僕にとってはしっくりこないが——
「お前といるのは案外悪くない」
「え？」
「……なんでもない。仕事だ」
　僕らの優秀な聴覚パーツを誤魔化せるわけなどない。薄ら笑いを浮かべながら、コナーが僕の元へ戻ってくる。
「なんて言ったの？」
「聞こえてたくせに。二度も言わせるな」
「ちゃんと聞かせてよ」
「断る」
　コナーが嬉しそうに、胸元の内ポケットからコインを取り出した。こいつがなにを言い出そうとしているか、簡単に察しがつく。優秀なＲＫ８００に手遊び癖をつけるとは、サイバーライフも余計なことをしてくれる。感謝することは撤回しよう。
「表が出たら、もう一回——」
「必要ない」
「どうして？」

「するだけ無駄だからだ」

「やれやれ」

　僕の言葉を無視して、コナーが高くコインを弾いた。回転しながら落下してくる。コインの向こう側に、コナーのやけに楽しそうな顔。

　アンドロイドの僕らの目には、この程度の速度、止まっているのも同然だ。当然どちらが出たかなど、確認せずともわかる。あのときだってそう。コナーも僕も、裏が出たことに気づいていた。

　手の中にコインを握り込んで、コナーが笑う。今回もどちらが出たか、見るまでもない。

　それがどちらであれ、僕がいればこれから先なにが待ち受けていようと、なんの問題もないのだ。

（終）

1 2 3

Add to Favorite Nice Share

@captain_enpaku (/u/captain_enpaku)

鉛白･ｱﾗﾝﾏｲｽﾀｰ･くるんちゅ

(http://x.com/captain_enpaku)